

福岡県遠賀郡の金石文集成 二一 芦屋町篇

中村修身

はじめに

これまでに、おりを見て集めていた旧遠賀郡内（中間市・水巻町）の金石文について報告させていただいた。今回はその続きとして、芦屋町内に関連する金石文の報告をさせていただくこととした。なお、芦屋で造り他所へ販売された梵鐘、鰐口、仏具、茶釜などの商品は原則として収録しなかった。また、集成は原則として江戸時代末までとした。

資料の紹介にあたっては、物件ごとに、銘文の書かれている物件、その現所在地、銘の書かれている部分そして銘文の順に記し、各物件の紹介の後にそれぞれに対する雑記を加えたものもある。

史学論叢に発表の場をご提供いただいた、別府大学史学、文化財学科関係の諸先生、情報提供いただいた芦屋町教育委員会の諸氏、貴重な御物や文化財に快く触れる機会を与えていただいた関係者の方々に深く感謝の意を表します。

芦屋町篇

- 1 文字瓦 芦屋町山鹿 芦屋町歴史民俗資料館保管
延喜十一年

雑記 原物は左右が逆字になっている。芦屋町浜口の浜口麿寺出土。当所は古代寺跡ではなく、古代幹道の駅跡である。

- 2 文字瓦 芦屋町山鹿 芦屋町歴史民俗資料館保管
目

雑記 瓦一面に多数の「目」文字がある。芦屋町浜口の浜口麿寺出土。当所は古代寺跡ではなく、古代幹道の駅跡である。

- 3 銅製経筒 芦屋町山鹿二二―一七 法輪寺
妙法蓮華経全部八卷
奉為関東御曹司千壽御前
相當一百箇日忌景御為滅
罪生善願證菩薩一日頓寫
供養如右

徳治三年正月廿二日

- 導師 遍照金剛澄空
勸進 遍照金剛皇鑒
母儀菩薩戒尼遍照金剛清淨覺
敬白

雑記 『太宰官内志』によると、文政六年法輪寺境内より出土。

4 宝篋印塔 芦屋町中ノ浜四一四 芦屋町中央公民館保管

正面

檀那円戒

沙彌實蓮

左面

建武四年丁丑 十二月十五日

雑記 芦屋町役場遺跡(芦屋町幸町二一〇)の発掘調査で出土。

5 禅寿寺梵鐘 島根県大田市 真光寺

一区画

大日本國筑前州葦屋津遠賀山禅寿寺大檀越橘左金吾公尚權與 本寺幾
乎十年法已成樓鐘未架專拙一心之誠懇重出十萬之家資為陰陽於土炭運陶
冶之巧成乾坤於橐籥顯晁氏之功

二区画

寔是不忘靈山之付属者也

作銘云

模範金銅 脱鉢十成

万鈎洪器 一口華鯨

叫峰頭月 応江水聲

其聲殷、其響鎗、

三区画

塵、刹、寥、清、

無明睡覺 煩惱夢驚

救此輪苦 息彼妄情

周廻法性 広利群生

仰祝皇帝 万年之榮

專為法門 無朽之楹

四区画

觀応改元上章撰提格應鐘十八日

住持比丘 頤禅

大檀那 公尚

鑄師大工 宗貞

雑記 本来は禅寿寺(芦屋町船頭町八一)所蔵である。原物に接する機会を持てなかつたので、銘文は『芦屋釜展』を写した。

6 金臺寺梵鐘 所在地不明

奉施入洪鐘一口 筑前國蘆屋津金臺寺

應永二年^{乙未}十一月十三日

第三世住持 像阿弥陀佛

源沙彌定教 藤原沙彌直阿

大檀那沙彌珪阿 □□阿藤原家貞

沙彌法道 沙彌度通

大工藤原其阿

雑記 本来は金臺寺(芦屋町西町一一二)所蔵である。『太宰官内志』は「当鐘今は長門国東豊浦郡江良村下山(ゲザン)の山所権現にあり」と記す。下山は山口県豊浦郡華山である。原物に接する機会が得られなかつたので、銘文は『筑前統風土記拾遺第三卷』を写した。

7 長福寺梵鐘 山口県深川 大寧寺

一区画

筑前垣崎庄葦屋津

長福寺洪鐘一口 長二尺八寸二分 口径二尺三分 厚二寸六分

銘曰

當寺為鉢 勝地得名

靈佛顯驗 庶民抽忠

檀主志苦 花鐘功成

三更覺眠 百里發聲

傳三千界 普利群萌

二区画

仰願弟子 鎮施芳英

病根消滅 命葉長生

堂舎安穩 庄園太平

右願意者為天下泰平国土豊饒

御願円満當領主家門繁昌殊者

大小結縁檀主等息災延命也然者

蒲牢音遍驚四主之眠花鐘響

遠期三會之晷以此功德奉資

三区画

天神地祇有縁无縁上添聖日

万千之光暉下成民草二世之

願望而已

應永三天^丙二月廿八日

大勸進六供僧侶等

慶道

大檀那 宗壽

珪阿宗言

重阿弥阿

四区画

結縁諸人等

大工 藤原幸満丸

沙弥其阿 法道

浄源 綱重

雜記 本来は長福寺(福岡県芦屋町)所蔵である。天保十二年から編纂を始めた『防長風土記注進』大寧寺の項に記載あり。

8 石塔(一对) 芦屋町山鹿二二一七 法輪寺旧蔵

東ノ塔

逆修尼本妙 三妄霧忽晴 五智覺月明 九界近捐典致引□菩提

西ノ塔

右逆修善根 爲沙彌妙覺 願奉不生理 悟入建此塔

應徳元年未歳五月日

雜記 文政六年法輪寺境内より出土。現物確認ができなかったので、銘文は『太宰官内志』を参考とした。当石塔は埋め戻されたという見解と法輪寺の礎石になっているとの見解が流布している。

9 光明寺梵鐘 所在不明。

應永廿年正月廿六日

筑前國遠賀郡□□庄

光明寺〔梵鐘〕

大勸進〔某々三、四名の名アリ〕

雜記 本来は光明寺（芦屋町西浜町二一―四）所藏である。島根県赤来町明窓院より第二次大戦時軍に供出、これにより消滅か。銘は『日本古鐘銘集成』によった。同書には、田沢金吾氏教示として紀年銘は「日本古二十年^證正月廿六日」であったと記している。

10 法輪寺梵鐘 所在不明。

大日本國西海道筑之前州山鹿庄葦屋津金島山法輪寺桂昌專抽懇誠 鑄洪鐘一口而以捨入本寺伏願天下泰平佛法興隆 次翼考妣共莊嚴報地 群類同圓成正覺 銘而云

千鈞重器 脱體現成 聲應四海 響遍八紘 沙鷗□□

□生夢鶯 叢林禮樂 國家昇平 仰天子無彊之榮 春秋

幾度 海晏河清

峇文明六年甲午歲孟夏仲瀚日

住持比丘法秋

願主比丘桂昌

大工大江氏淨江

雜記 本来は法輪寺（芦屋町大字山鹿）所藏である。原物の確認ができなかつたので、銘文は『太宰官内志』を参考とした。

11 仁福禪寺鰐口 所在不明。

奉懸筑前州葦屋津浦陀山仁福禪寺皆明應二天夾鐘中八日願主各敬白

雜記 本来は仁福寺所藏である。仁福禪寺の位置不明。『太宰官内志』は「此鰐口上座郡久喜宮村觀音あり」と記している。原物が確認できなかつたので、銘文は『太宰官内志』によった。

12 福嚴寺鰐口 所在不明。

奉施入葦屋福嚴寺地藏堂寶前文明^庚卯月吉日願主衛三郎劄白

雜記 本来は福嚴寺（芦屋町）所藏である。福嚴寺の位置不明。『太宰官内志』は「今は鞍手郡芹田村毘沙門堂にかかれり」と記している。原物が確認できなかつたので、銘文は『太宰官内志』によった。

13 水盤 芦屋町船頭町二一―四八 岡湊神社

延宝八年

奉寄進祇蘭宮

申四月廿三日大田崑□□□□

14 海上遭難供養塔 芦屋町山鹿一八一― 薬師堂

柱正面 台石正面

當浦於海上相果申百五十人

再建 當浦中

為頓證菩提 柱左面 台石左面

元禄十三年庚辰曆

明治二十一年

三月下旬
周施人
中西仁三郎
野間作右衛門

雑記 再建に当たって、台石は新たに造られている。

15 狩尾神社鳥居 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右柱

奉創立神門一區 産徒中

正面額

狩尾神社

左柱

享保十年龍次乙巳九月穀旦 大宮司波多野左近平春重

16 鳥居 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社

右柱

奉造立神門一區 産子中

正面額

祇園社

左柱

享保十一^{丙午}正月吉日

大宮司波多野右近正春

17 庚申尊天 芦屋町山鹿六 城山神社

本体正面
庚申尊天
裏面
寛保二^{戊天}天
八月四日
魚町
商人中
台石裏面

18 宝篋印塔 芦屋町山鹿一八一 薬師堂

上函正面

下函正面

八十却億生死重罪

一時消滅生兔災歿

死生佛定苦有應墮

阿鼻地獄若於此塔

上函左面

下函左面

或一禮拜或一右達

塞地獄門開菩提路

上函裏面

下函裏面

寛延二^巳歲

二月十九日

施主 秋枝庄兵衛
同姓勘次郎

上函右面

下函右面

若者有情能於此塔

一香一花禮拜供養

塔

塔

塔

塔

19 惠比須社鳥居 芦屋町西浜町一一三五 惠美須神社

右柱

奉再興鳥居一基村組中
丁組中

正面額

惠美須社

左面

寛延三龍集辰年春三月吉旦

20 半鐘 芦屋町中ノ浜町五十一五二 安養寺

一区画

高岡市

鑄物師 孝子次右衛門

〔この区画銘文陽刻〕

二区画

南無阿弥陀佛〔この一行陽刻〕

三区画

筑前国遠賀郡芦屋津

慈雲山安養寺

八代住侶 圓明

宝曆四甲戌年三月上浣日

為釋了觀信士

施主 大城邑源太郎

四区画〔銘なし〕

五区画

十三世住転 大啓

明治十三年二月改鑄

為報恩

施主猪熊区大貝重吉

妻 トメ

旧施主子孫安高麻郎

六区画

入一法句〔この一行陽刻〕

七区画

十四世住職劉城

昭和三十五年再鑄

施主嗣子大貝好雄


妻ト子

源太郎末孫安高榮吉

雜記 昭和三十五年に高岡市で鑄造の折に過去二度の銘文を毛彫りで記している。

21 一字一石大乘妙典 芦屋町幸町九 芦屋浜靈園

正面

 一字 一石大乘妙典

裏面

施主 芳永幸重郎

吉永沖之助
為先祖菩提

宝曆四甲

七月廿五日

雜記 おおよそ十年前に光明寺から移された。

22 役行者像 芦屋町山鹿一九一―一八 須賀神社

本体正面

台石裏面

役行者 寶曆九年正月吉日献納

野中久次

大正七年七月修繕再献

野中角右工門

長男全茂一郎

二男全辰之助

23 卓錫泉碑 芦屋町山鹿二一―五一 観音堂

正面

本邑人氏秋枝勘次郎廣利

捨浄昧穿此井寄附

卓錫泉 禅慶禅院

皆寶曆癸未冬十一月吉日

院主宗周識

裏面

地施

筑譽上人

石工江崎小右衛門

24 猿田彦大神 芦屋町山鹿浦 厳島神社

右面

天明元年

正面

猿田彦大神

25 半鐘 芦屋町山鹿二〇〇―一 芦屋町歴史民俗資料館

施主

矢野原村四郎左衛門

専念寺 什物

天明元^辛五月日

雑記 由来は不明。

26 猿田彦大神 芦屋町山鹿二三 旧道交差点

右面

天明三年

正面

猿田彦大神

左面

癸卯正月吉日

27 灯塔 (一对) 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右側正面

柏原浦大多次

清吉

左面

奉寄進

裏面

寛政三亥九月吉日

左側右面

寛政三亥九月吉日

正面

奉寄進

左面

柏原浦大多次

清吉

28 灯塔(一对) 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右側正面

柏原浦

中西四良治

左面

獻燈

裏面

寛政五丑正月吉日

左側正面

柏原浦

中西四良治

裏面

寛政五丑正月吉日

右面

獻燈

29 芭蕉翁菖蒲塚 芦屋町船頭町八一 禪壽寺

右面

寛政五癸丑歳

正面

芭蕉翁

菖蒲塚

郭公啼や

五尺の阿弥め草

左面

榎菴 宇麦

麗亭保能香 發起

嗣志 吉永 松卜 建之

太田 希王

30 庚申尊天 芦屋町西浜町一六一四 猪春大明神社

本体右面

寛政六寅 年

正面

台石正面

庚申尊天 津中〔横書〕

左面

二月廿一日

31 猿田大彦命 芦屋町山鹿二一四 築山天満宮

于時寛政十一年

猿田大彦命

己未五月吉日

32 石塔（一对） 芹屋町西浜町一六一—四 猪春大明神社
右側柱

寛政十一年未七月廿五日

常夜燈

かけや 観音丸

かけや 天満丸

志をや 灘吉丸

左側柱

寛政十一年未七月廿五日

常夜燈

吉のや 天神丸

若松や 大黒丸

中のや 永徳丸

33 狛犬（一对） 芹屋町船頭町一二 岡湊神社

右側上台石正面

奉獻〔横書き〕

下台石左面

當浦

掛屋観音丸

施主

中西次郎兵衛

上台石裏面

下台石裏面

寛政

十二

庚申

歳五

月吉

辰日

冲船頭

松田平九郎

乗組中

左側下台石右面

當浦

掛屋天満丸

施主

越野三郎平

左側上台石正面

奉獻〔横書き〕

下台石左面

周州上関室津

石工

和泉屋八兵衛

下台石裏面

冲船頭

刀根貞五郎

乗組中

寛政

十二

庚申

歳五

月吉

辰日

34 狛犬 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

正面

奉寄進

左面

願主

吉田貞右工門

白石宇兵衛

裏面

享和二年壬戌

九月吉日

右面

長脇赤間關

石工

松尾伊兵衛清通

35 宝篋印塔 芦屋町中ノ浜町五十一一六 海雲寺

上函右面

下塔身右面

為寛政丁巳火災亡魂及

无依無怙法界萬靈造塔

施主峯生生第卅六親春

属同生極樂也伏翼

天下太平国家安寧風雨

順時五穀能登一切衆生

皆歸正法焉維時享和三

癸亥春遍照金剛寬海誌

卍

上函正面

卍

上函左面

卍

上函裏面

卍

下函正面

卍

下函左面

經日

於此塔一
香一花札

下函裏面

拜供養八十億劫生

□重罪一時消滅

雜記 当宝篋印塔の中に銅製經筒(36)と銅板(37)が収められていた。

36 銅製經筒 芦屋町山鹿 芦屋町歴史民俗資料館保管

奉書寫寶篋印陀羅尼紺帙金泥

八万四千卷之内遍照金剛 豪潮

享和三癸亥□春吉辰

雜記 海雲寺(芦屋町中ノ浜町五十一一六)所在の宝篋印塔(35)内から

銅版(37)とともに収められていた銅製經筒である。

37 銅版 芦屋町山鹿 芦屋町歴史民俗資料館保管

銅版一枚目

卍□□卍□□卍□□□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□□

戊午火災亡魂及无依無怙法界

萬靈造塔施主生生世世六親春

属同生極楽也伏冀 今上皇帝

塞□萬萬歳太樹君武運長久天

下太平国家安寧風雨順時五穀

能登一切衆生皆歸正法焉維時

享和癸亥春願同生極楽諸聖為

主為伴補我八万四千大願豪潮

銅板二枚目

□千之内

雜記 当銅板は、銅製經筒(36)とともに海雲寺(荻屋町中ノ浜町五一六)所在の宝篋印塔(35)内に収められていた。銅板は大きな銅板一枚と小さな銅板(横二二八箕ミリメートル、縦一七二ミリメートル)三枚の計四枚ある。銘文は小さい銅板二枚に格子状の割付けがされ、針書きされている。銅板一枚目の二行は梵字であるがさびてよめない。荻屋町歴史民俗資料館作成『荻屋地方史年表』によると、寛政九年に山鹿大火事が記されている。

38 弘法大師座像 荻屋町柏原亀甲 善福寺

上台石正面

南無大師遍照金剛

上台石裏面

文化元年甲子三月廿一日

柏原浦

妙海尼謹建

下台石裏面

赤間關

石瀧本吉兵衛

39 石蘭句碑 荻屋町船頭町八一 一 禪壽寺

正面

人すまぬ此

石蘭

山井や秋乃月

裏面

文化三年 妻 知榮

二月□二値

勘迎

書畢

雜記 金臺寺の江戸期過去帳に石中庵秀宇石蘭居士の法名があり、文化二年没となっていると聞く。

40 狩尾宮鳥居(一) 荻屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右柱

奉創立神門一區 願主柏原浦中西嘉平憲貞

正面額

狩尾宮

左柱

大宮司

文化四年_卯年九月吉日 從五位下波多野駿河守平朝臣春樹

石工 江崎才七元秋

41 狩尾宮鳥居(二) 荻屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右柱

柏原浦

奉勸立願主 縄田正右衛門英道

正面額

狩尾宮

左柱

文化四丁卯年九月吉日

大宮司

平朝臣春樹

42 神武宮鳥居 芦屋町正門町一四他 神武天皇社

右柱

文化五年在戊辰三月穀且創立

中西次郎平滿恒
越野三郎平滿久

正面額

神武宮

左柱

大宮司黒山讃岐守從五位下藤原朝臣吉政

観音丸

掛屋

天満丸

乗組中

住吉丸

43 大師座像 芦屋町柏原亀甲 善福寺

台左右面

文化五戊辰夏

初安居日

正面

金 豫州

高 三角寺

山 奥院

左面

施主

小田彦藏

44 天満宮鳥居 芦屋町山鹿二一四 築山天満宮

右柱

奉再建造神門一基

正面

天満宮

左柱

魚町中

文化十年□□月吉日

45 白山大神鳥居 芦屋町山鹿 城山公園内(白山神社)

右柱

奉再建造神門一基

大宮司平朝臣春樹

正面額

白山大神

左面

石工江崎才七

文化十癸酉九月吉日

魚町中

46 狛犬(一对) 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右側正面

奉獻〔横書き〕

裏面

文化十三_丙年

九月吉日

願主村

戎屋新七武清

左側左面

石工

江崎傳七吉久

正面

奉獻〔横書き〕

裏面

文化十三_丙年

九月吉日

村

戎屋新七武清

大宮司

駿河守代

47 巖島神社鳥居 芦屋町山鹿 巖島神社

右柱

奉創立神門一區 願主山鹿村戎屋十郎正明

正面額

巖島神社

左柱

文化十四_丁八月吉日 大宮司平朝臣春樹

雜記 この鳥居は戎神社（山鹿一六一二）廢社にともない移設と聞く。

48 宝篋印塔 芦屋町船頭町八四―一一 禪壽寺

上函右面 下函右面 台座右面

經日 禪壽寺

悦堂代

上函正面 下函正面 台座正面

大乘妙典 文政

一字一石 元年

吉日 七月 戊寅

上函左面 下函左面 台座左面

於此福一杏一 發起

華禮拜供琅八 和田吉右衛門

十億劫生□重 施主

深□時消滅 田村嘉吉

中西善藏

和田藏平

和田保左衛門

和田吉平

上函裏面

27

49 大黒天像 芦屋町西浜町二一―三五 恵比須神社

台石右面

文政二巳卯

十一月吉日

正面

海上安全

賣買永續繁榮

左面

掛屋

観音丸

天満丸

住吉丸

乗組中

50 大黒天像 芦屋町山鹿一九―一八 須賀神社

台石右面

文政四辛巳

九月吉日

大宮司

駿河守代

台石左面

戎屋勇八 戎屋四郎平 縄田屋定右工門 田中屋伊兵衛

戎屋仁右工門 岩井屋徳十郎 縄田屋善三郎 夷屋三右工門

〔原文人名横一列〕

台石裏面

肥前伊万里

石工 七五郎

51 猿田彦大神 芦屋町船頭町二一―四八 岡湊神社

台石右面

文政五壬午四月

本体正面

猿田彦大神

台石正面

本体裏面

青面金剛

雑記 神仏習合時代を伝えている。本体は砂岩、台石は花崗岩と石材が違ふ。また、本体は変則的な四角柱であるが、台石はきれいに整形された六角柱である。

52 濱中又右衛門茂行墓 芦屋町山鹿二二―一七 法輪寺

正面

實相院天翁義真居士

裏面

君姓濱中諱茂行稱又右衛門號三遊齋谷惠君目

幼家貧及長發憤刻苦弁痛節衣食終能興産家聲

日顯可謂一家之始祖哉文政六年癸未二月十六

日病卒于家行年六十有四

三世孫 又右衛門茂群改建之

雑記 濱中家墓(73)と(95)と当墓は同時に造り替えられている。

53 三部妙典塔 芦屋町西浜町一一一四 光明寺

上函正面 下函正面

三部妙典

左面

左面

台石左面

安永六年酉十一月廿五日

文政八酉春

轉譽善人信男

心譽光觸善女

施主

心譽光觸善女

刀根七兵衛

寛政八辰八月廿二日

七十歳賀 恭通

裏面

裏面

寛政六寅十月廿一日

周防室津石工

玉光秀意信士

智還妙早信女

磯邊屋

智還妙早信女

弥兵衛

右面

右面

安永三年十一月廿四日

當山二十一世

光譽霜林居士

穉月妙圓信女

常譽代

穉月妙圓信女

延享四卯九月七日

54 祠 芦屋町船頭町一二 岡湊神社境内

文政十年十一月吉日

奉寄進和田吉右衛門

55 五重層塔 芦屋町船頭町八一一一 禪壽寺

東面五段 四段

三段 二段 一段

南面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

西面五段 四段

三段 二段 一段

北面五段 四段

三段 二段 一段

東面五段 四段

三段 二段 一段

天明二年辛卯四月吉辰

光明真言寶塔再建
當山四十世權大僧都法印智圓誌

東面台座

十方施主

南面台座

記国屋

藤右衛門

蛭子屋

茂介

高浜屋

畝介

浦松屋

善九郎

掛屋

喜代松

掛屋

三郎平

北面台座
俵屋
西面台座
関屋

茂七
清治郎

吉野屋
田中屋

七六
傳三郎

吉野屋
塩屋

七藏
傳四郎

恵比寿屋
若松屋

徳兵衛
善九郎

萬屋
穂阪元孚

武平
米屋

植木屋
傳次郎

善藏

植木屋
善助

塩屋

与右衛門

塩屋

久兵衛

〔剥落している〕

正面

此尊像ハ予州三角寺奥之院本尊弘法大師御真作之写也
大師而真作之由来ハ御年四十二歳之御時岩窟に三七日
籠らせ給ひて作らせ給ふ尊像なれば世に厄除の尊像と
いひ伝ふなり高野山は禁諸人の知る処依之大師女人
らをあわれみ当山を□□且御自作を残し置高野山に
□□一度此地に参詣の輩ハ三悪趣におとさじとの御
慈悲に依て□□□□□□とげるべきことなり

左面

文政十一年歳次

戊子正月建之

雑記 正面は風化が進み読めない部分があつたので藤本春秋子氏資料を参考とした。

57 灯塔（一对） 芦屋町船頭町一二 岡湊神社

右側正面

奉寄進

裏面

天保二年卯十一月吉日

願主村田勝十

左側正面

奉寄進

裏面

雑記 南面台座は全く読めないので田中八郎氏資料を写した。当五重層塔は神仏分離令による千光院廢寺に伴い禪壽寺に移されたと、聞く。

56 弘法大師座像 芦屋町船頭町八一 禪壽寺

右面

天保二年卯十一月吉日

中西善工門

58 灯塔 芦屋町船頭町二二―四八 岡湊神社

柱正面

式日獻燈

柱裏面

天保三年辰九月吉日

台石二段目裏面

米屋定右門 塩屋興平 植木屋善藏 萬屋武平

関屋清次郎 太田喜平太 吉野屋七作 米屋新次郎

田中屋傳三郎 依屋茂七 関屋助次郎 綿屋甚右衛門

蛭子屋儀助 萬屋吉右工門 啓徳丸徳七 祇園丸助七

辨天丸兵助 (この面人名横一列)

雑記 同形の(69)と一対に配置されている。

59 灯塔(一対) 芦屋町船頭町二二―四八 岡湊神社

右側右面

再建 山鹿魚町

正面

奉寄進

左面

天保四年癸巳

二月吉日

左側正面

奉寄進

左面

再建 芦屋町
小田和藏

右面

天保四年癸巳

二月吉日

60 百度石 芦屋町船頭町二二―四八 岡湊神社

右面

同

天保四年^{癸巳}六月吉日

正面

百度石

左面

若松屋

同 善九郎

同 吉平

裏面 藤十郎

同 照右衛門

同 和平

61 猿田彦大神 芦屋町田屋 徳満神社

猿田彦大神

□□□□甲午□正月吉日

田屋中

62 惣本山知恩院直末表碑 芦屋町山鹿一三一二 大願寺

右面

筑前遠賀郡山鹿邑皆乘山得主院大願寺我「鎮西文之所闢基督山鹿兵藤次為之大檀越後有敦而廢處長中□蓮「杜經譽再建乃為弘善寺之屬及寛政四年壬子之春少林寺進譽和尚国「上現住阿譽以其資為伴檀越大保正秋枝□以興廣所謁闡譽日時矣「□使等宜屬知恩院已誅之請檀越又以啓其師進譽和尚「及使成道寺光譽請之□喜寺香□事医聞於「六行。「は改行頭。」

正面

惣本山知恩院直末表碑

左面

官□可闡譽奉書請之知恩院終聽許焉大□

寺而直屬知恩院實自與如之闡譽禎請余其始末

之記乃為記大□□□

鎮西本山四十九主□賢洲

寛政十年戊午六月八日

裏面

表碑靈立發起式

必 鹿門院德譽切釋宗休居士

文 圓村院判譽正道居士

必 照雲院廣譽□□居士

父 德善院功譽動 居士

于時天保六年乙未利三九月現住十七世真譽和尚建之

秋枝八郎廣温

同 野間藤右衛門

同 藤江政右衛門

同 桑原定右衛門

63 巡礼同行碑 芦屋西ノ浜 観音寺

右面

天保六年未三月吉日

西国順禮同行中

正面

御国中 くはんをん寺

二十二番

雜記 参道にあり

64 狛犬（一對） 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社

右側台石正面

牽獻（横書き）

左面

施主

多賀谷伊七

裏面

天保六^乙_未

歲四月吉

辰造焉

左側台石右面

施主

多賀谷伊七

正面

奉獻〔横書き〕

裏面

大宮司

波多野飛驒守

施主〔下横一列に田中屋□□四郎、米屋新右工門、富屋、京屋、村田屋
□右衛門など人名約十名あるが読めない〕

雑記 神仏習合時代のなごりを伝えている。

65 祇園宮鳥居 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社参道

右柱

奉寄進神門一区

願主 濱中又右衛門茂陵

正面額

祇園宮

左柱

大宮司從五位下

波多野飛驒守平朝臣春郷

天保六年乙未八月吉日

石工

江崎才七吉秋

66 熊野大権現鳥居 芦屋町西ノ浜 金臺寺

右柱

天保七在歳丙申九月吉辰 當山廿二吉賢阿代

叢記門前甚助

正面額

熊野大権現

左柱

67 父母菩提塔 芦屋町柏原亀甲 善福寺

右面

亀甲山

太子堂開基主

白石仁平同人妻

正面

文化八未七月八日

長譽承縁善士

真譽妙戒法尼

文化十四年十一月十八日

左面

天保八西十月

爲父母菩提

白石源三郎建

68 宝篋印塔 芦屋町山鹿二二一七 法輪寺

上函正面

不

左面

下函正面

妙典一字一石塔

左面

天保九戊戌年

秋七月十五

濱中又三郎茂陵拜寫

男又右衛門茂群建塔

裏面

裏面

書寫功德經文分明諸法實相「勸獎衆生開

示悟入階漸脩行「多寶佛塔善哉贊成婆竭

龍女「頃爾珠呈三周妙說四衆諦聽「是以

回向是以運誠普天雲靜「率土水清五穀豐

饒萬民康寧「子孫孝順家門昌榮茲以記之

「勒以為銘 (この面八行。「は改行頭。)

右面

右面

右面

右面

69 灯塔 芦屋町船頭二一四八 岡湊神社

柱正面

式日獻燈

柱裏面

天保十己亥八月吉辰

台石上段正面

肥前伊万里

寄附連名

石丸源左右門

水町政右門

横尾武右門 前川前左右門

末石松太郎 松尾彦兵衛

〔人名横一列〕

上段左面

岩本佐兵衛

田中兵治

岡田卯之助

台石中段正面

吉沢喜兵衛

横尾勘兵衛

井上鶴吉

横尾惣吉

浦郷忠兵衛

中段左面

川浪兵助

浦郷政右門

立石辰十

石丸鹿太郎

川浪庄右門

台石下段正面

天ヶ瀬慶十

岩永平左右門

吉村七郎兵衛

前川善兵衛

西忠次郎

前田政十

台石下段左面

當町保正

江藤與四郎

立岩岩次郎

城島利左右門

岡田卯之助

田中米次郎

本岡城太郎

古沢梅五郎

岡田卯左右門

吉田平助

天瀬庄吉

天瀬太兵衛

本岡市左右門

岩本清吉

上瀧増太郎

福地徳次郎

梅崎利右門

中尾長右門

馬場傳右門

松尾幸吉

田丸嘉兵衛

山口菊次郎

武富善助

大塚直太郎

高庄氏登與

東松之助

濱口屋庄五郎

太田卯右衛

西儀右衛門

吉沢平右門

瀬戸口仙十

江藤吉次郎

前田治三郎

田丸常三郎

松本幸右

大塚伊左右門

石丸近次郎

福地弥兵衛

岩永仁太郎

平松兵吉

森永作右門

浦郷喜右門

西儀三郎

古沢卯之助

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

〔人名横一列〕

世話人

塩屋七右門 掛屋清次郎 角屋真平 開屋茂七

梶屋清五郎 若松屋藤十郎 [人名横一列]

雑記 同形の(58)と一対に配置されている。

70 後水干拓碑 芦屋町山鹿字後水

正面

後水干拓板碑

裏面

天保十四年癸卯四月

大保正格保正 浜中又右衛門

普請方 戸畑邑與一郎

御出役 橋本久五郎

与頭 平七

喜太郎

甚造

甚右衛門

石工 才七

伝七

雑記 右銘文は編者の古い記録であるが経緯に記憶がない。藤本春秋子氏資料と類似しているのでここに収めた。平成二十七年六月一日再調査を行ったがすでに現物は確認できなかった。再建碑が芦屋町山鹿二十三(後水)にある。左にその銘文を紹介しておく。

正面

後水干拓板碑再建碑

裏面

天保十四年〔月日剥落〕

大保正格保正 浜中又右衛門

普請方 戸畑邑 與一郎

御出役 橋本久五郎

組頭 平七 喜太郎

甚作 勘右衛門

石工 才七 伝七

右面

昭和五十八年三月 芦屋町教育委員会建之

71 御潮井台 芦屋町西浜町一一―三五 恵比須神社

正面

奉寄進

左面

願主 桑原傳次郎

右面

天保十四癸卯歲

72 百度石 芦屋町山鹿一九―一八 須賀神社参道

右面

天保十四年卯六月吉日

正面

百度石

左面

米屋又右衛門

玉垣

枡一屋半三郎

七話人

榮松屋貞兵衛

石屋才七

枡屋弥吉

73 濱中又三郎墓 芦屋町山鹿二二ノ一七 法輪寺墓地

正面

轉性院真法浄輪居士

裏面

君姓濱中諱茂陵稱又三郎號朶雲齋華山世業之餘最善插花其技頗精妙妻者大久保氏生二女所病卒後娶井上氏無子養堀江氏之長子為嗣天保十四年癸卯十月十四日病卒行年六十有六

男 又右衛門茂群建之

雜記 濱中家墓の(52)と(95)と当墓は同時に造り替えられている。

74 猿田彦大神 芦屋町山鹿 萬千代神社

正面

猿田彦大神

裏面

天保十五年

辰正月吉旦

萬町中

雜記 萬町は当地の旧町である。

75 灯塔(一対) 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社

右側正面

式日燈

左面

山鹿庄屋

大庄屋格

濱中又右工門

裏面

天保十五^甲_辰載

夏六月吉辰

右側台石裏面

石工

山鹿村□

江崎才七

右側台石正面

式日燈

左側正面

山鹿町

大庄屋格

小田□右衛門

同町

大庄屋格

小田彦五郎常陸

同町

大庄屋格
林半蔵正敏

裏面

天保十五^甲辰載

夏六月吉辰

76 一石一字塔 芦屋町幸町四 道端

正面

大乗
妙典 一字一石塔

裏面

弘化二年歳在乙己五月吉日

中西善蔵

雑記 芦屋町の構口横にあり。

77 灯塔(一对) 芦屋町山鹿二―四 築山天満宮

右側右面

弘化二^乙己八月廿五日

正面

獻燈

左面

小田定右衛門繁種

左側右面

弘化二^乙己八月廿五日

正面

獻燈

左面

小田彦五郎常睦

78 水盤 芦屋町西浜町三―三五 観音寺

右面

弘化二歳乙己

十一月吉辰

現住琢峰代

正面

奉獻(横書き)

左面

横田儀四郎 福田次八 高崎与助 同次郎十

古賀弥平 福田儀右門 □左作次郎

(この面人名横一列)

79 灯燈 芦屋町西浜町一―三五 恵比須神社

右面

弘化三丙午正月十日

正面

奉獻 海上安全商賣永續
願主掛屋船乗組中

願主掛屋船乗組中

台右正面

明治三十八年六月

修繕之

中西治郎半恒直

80 蛭子神社鳥居 芦屋町西浜町一―一五 蛭子神社

右柱

桑原傳次郎宗昌

同 勘兵衛季遠

奉再建

額正面

蛭子神社（横書き）

額裏面

昭和六十三年

八月吉日

奉納柴田足七

左柱

弘化三年丙子六月吉辰

小野勘右工門茂尋

小野傳右衛門登重

雑記 少なくとも二度改修が行われている。

81 大神宮 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社

正面

大神宮

裏面

弘化四年丁羊春菅華恭書

台座石正面

伊勢講

大保正格

小田彦五郎 小川清五郎 中西友右工門 野間定兵衛

野間藤次郎 船津幸平 高橋半兵衛〔この面人名横一列〕

82 辨財天鳥居 芦屋町山鹿八 遠賀川河口の川中

右柱

世話人吉永勘七

全 船津幸平

全 小川清五郎

石工江崎文七 吉秋

奉再建華表一基 発頭人中西只右衛門繁満

大庄屋格庄屋浜中又右衛門茂群

大庄屋格小田定右衛門繁種

大庄屋口林半蔵正敏

大庄屋口林半蔵正敏

社司快寿院別當

正面額

辨財天

左柱

弘化四歳在丁未五月吉辰

〔以下人名右文下横一列〕

小田彦三郎 小田彦十郎 中西□蔵 中西友右工門

小田彦蔵 野間貞兵衛 久□右平 □山嘉右工門

倉野儀兵衛 高椋忠兵衛 船津幸平 高崎久右工門

池田次左衛門 □□枝甚 □□□次七

雑記 厳島神社の一の鳥居。極めて風化が進んでいる。人名、役職などは、藤本春秋子氏資料と秦清氏資料を参考とした。

石 屋勘兵衛

筑前屋磐右工門

河内屋佐兵衛

備中笹岡問屋

蛭子屋源次郎

世話人

辨天丸兵助

83 狛犬（一対） 芦屋町正門町十四 神武天皇社

右側正面

奉獻（横書き）

裏面

弘化四歳「在丁未八」月吉日「原文三行、「は改行頭」

右面

世話人

正面額

岩津宮（造り替え）

左柱

嘉永二年己酉正月吉辰 江田與平

越野三郎平

蛭子屋儀助

万屋武平

鹽屋喜左衛門

米屋甚五郎

大田屋弥右工門

掛屋直助

世話人 鹽屋甚三郎

桑原傳次助

左側正面

奉獻（横書き）

裏面

願主

江田與平

84 岩津宮鳥居 芦屋町白浜町七―五 岩津神社

右柱

奉再建

大坂生蠟問屋

尼嵩屋勘兵衛

河内屋小兵衛

三河屋金兵衛

85 灯塔（一対） 芦屋町正門町一四他 神武天皇社

右側柱正面

式日獻燈

右側柱左面

嘉永元年戊申五月吉日

右側柱裏面

町浦世話人

陶器旅行中

右側台上段正面

發起

中西次郎兵衛恒久

越野三郎平守任

小野清次郎茂広

高崎徳右工門義高

柴田清七朝光

〔人名横一列〕

右

順知

右側台上段左面

石工

江崎傳三郎

右側台上段裏面

當町庄屋

江藤与四郎勝照

右側台上段右面

明治十一年六月

修繕肥前伊

万里幹事

二代石丸源左工門

本岡市太郎

本岡佐吉

該町幹事

中西卯右工門

庄野藤七

中西清八

右側台石下段裏面

昭和四十二年

九月吉日復元

崇敬者中

左側柱右面

大宮司藤原朝臣吉雄

左側柱正面

式日獻燈

左側柱裏面

肥前伊万里

陶器問屋中

左側台上段正面

伊万里世話人

石丸源左衛門

横尾武右衛門

田中兵次

本岡城太郎

〔人名横一列〕

左側台上段裏面

發起

小野清次郎茂弘

柴田清七朝光

高崎徳右工門義高

中西次郎兵衛恒久

越野三郎平守任

〔人名横一列〕

當町浦

陶器旅行中

雜記 修理は台石部のみ。

86 鳥居残片 芦屋町山鹿浦 巖島神社
嘉永二年 孫兵衛 藤吉

古 伊三郎 吉助
浦臺 □□□ 左七
石 伊□八 次七良
若發 林藏 次右衛門
起 栄吉 勝助

酉二月吉辰

雜記 鳥居の柱であるが、明治七年旧九月吉日に旗柱に転用されている。

87 御潮井台 芦屋町船頭二一四八 岡湊神社

右面

嘉永三年庚戌正月吉日

正面

奉獻 錢屋源次
米屋原右衛門

88 三界萬霊 芦屋町船頭町八一 一 一 禪寿寺

右面

嘉永三年庚

戌三月建立

正面

三界萬霊

左面
當町中

89 鋪石寄進碑 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社

右面

嘉永三歲庚戌六月吉日

正面

鋪石寄進 倉野義兵衛
高棟忠兵衛

90 石柱塀 芦屋町西浜町二一五 蛭子神社

その一正面

嘉永三年

その一裏面

庄屋□ 江藤與四郎

庄屋手傳江藤與五郎

その二正面

奉寄進

その三正面

市場早

雜記 その他の石柱には別々の屋号紋が彫り込まれている。

91 とも綱石 芦屋町西浜町九一三 遠賀川河口

右面

嘉永四年辛九月吉日

正面

世話人 □□□□郎
萬屋平六

雑記 形態から見てとも綱石でよいと思う。(92)と組み合わせとして
説明されている。

92とも綱石 芦屋町西浜町九―一三 遠賀川河口

保正 江藤與史郎代

雑記 (91)と、組み合わせとして説明されている。

93 旗柱 芦屋町山鹿六 城山神社

右側正面

嘉永六載

裏面

小田彦四郎 小田喜四郎

連名 中西彦九郎 香月源平

久枝孫平

左側正面

癸丑正月吉旦

裏面

中西八右衛門 小田彦右衛門

連名 野間貞次郎 小田判三郎

三好市右衛門

94 狛犬(一対) 芦屋町船頭町一二 岡湊神社

右狛犬右面

嘉永六癸亥年

正月吉祥日

正面

奉

左面

海陸安全

左狛犬右面

海陸安全

正面

獻

左面

錢屋

施主

蛭子屋

儀助

95 濱中又右衛門墓 芦屋町山鹿二二―一七 法輪寺墓地

正面

彰徳院寛翁紹裕居士

裏面

居士又右衛門者堀江氏長男也有故續濱「中又一郎家以其家之女妻之有三
男一女」而其妻早没爾後以蘆屋浦中西恒久之姉「又妻之嘗因郷薦為保正

天保丙申之年以「救貧民之功從官廳屢蒙賞譽又權為「大保正之列性常好活花之心頗究與□號「三遊齋花惠也嘉永七年甲寅三月四日病」而卒于家行年五十有一
〔当面八行。〕は改行頭。〕

雜記 山鹿後水干拓碑 (70) に記されている濱中又右衛門の墓である。
濱中家墓の (52) と (73) とと当墓は同時に造り替えられている。

96 旗柱 (一対) 芦屋町白浜町七ノ五 岩津神社
右側正面

同 傳次良

献 當若者中 次兵衛門

右兵衛門

裏面

寅十一月吉日

左側正面

世話人 □七

奉 町内安全 熊市

仁三良

裏面

甲嘉永七年

97 水盤 芦屋町山鹿一一ノ三九 安樂寺

正面

凍盤 (横書き)

裏面

安政二^乙初冬
金龍山現住

彰願代奏之

施主石工

江崎才七吉秋

98 灯塔 (一対) 芦屋町山鹿狩尾 狩尾神社

右側正面

安政二乙卯歳

左面

式日燈

裏面

多賀谷伊右衛門道□

左側正面

秋九月吉日

裏面

多賀谷伊右衛門道足

右面

式日燈

99 貝葉院釋高寸浄哲居士 芦屋町山鹿一一ノ三九 安樂寺

正面

貝葉院

釋高寸浄哲居士

左面

嗚呼世有胃其名而区其實者儒生與佛者是也問其業則語孟子六經「大小來聞其說則或周公孔子觀其服則或菩薩羅漢而察其行則利」名貧慾夫賣堅駟僧且有不屑也豈非骨其名而亡其實者與有商賣「其業而儒佛其行者余於倉野翁父子見之翁諱義知稱儀兵衛筑州「山鹿人也 本姓佐野氏為倉野氏之贅婿以鸞陶器為業至翁二世而「行商于東國蓋以翁為始家產頗饒性好慈善質直方正常不苟其言「行而篤捨浮屠氏輪廻之說令嗣義壽能守其家風不敢失墜所謂商「賣其業而儒佛其行者非耶安政甲寅十月翁携兒忠次郎姪源兵衛「客于美濃獲疾在大垣客舍急請治療於府下名匠江馬翁而病勢不「滅於是輿疾至浪華衆醫無効以十二月念一日歿于逆旅享年四「十七其屬絃之前子姪及逆旅主人問其所欲言翁日諸惡莫作衆善「十一行。「は改行頭。」裏面

奉行内典有金言兒北軍宜勤焉我平生歸依乎三寶吾家憤勿怠焉義「壽既為家嫡且其志老成足以託後事矣爾輩事之如父而可也我今「以不見彼為憾雖然命也又何言乎自非其平素有定於胸中安得其「治命簡而要如此乎先是義壽在肥州伊万里亦罹危疾焉幸得痊而「歸家忽接舍弟之信得審乃父乃倉皇就路當是時赤間有鈴「木拙齋翁者匿名噪于四方便道造門語以故而請日願得先生一診「難死無憾也且泣声淚齊下鈴木翁愍然諾之即日相伴登舟海「路過防長而及藝之御手洗是日風濤大起舟不能進不得已繫纜於「港有一舟泊焉呼義壽甚急驚而顧即弟等護靈柩而遷鄉也義壽號「慟殆絕而後謹受其遺命岡極之痛可想也於是同回舟實乙卯正月「初二日也嗟乎萬里大洋兩舟相遇極難矣人以為孝感所致也其月「其日葬于邑之安樂寺法諡日高寸淨哲居士大谷法王所賜云配「倉野氏有子女五人長即義壽號輕翹稱儀七郎後從通稱亦為儀兵「衛次儀八折屋別居不幸□死次女子次郎忠次郎出嗣高棟氏李日「柳吉以為儀八之嗣姪源兵衛区兄佐野某之遺孤也育之家後義壽「與以若干金日聊以為子產業之資子宜務力與家今日之贈休我先「人之意

也□子勿忽焉其厚於親族亦可善美翁風有購一切經布施

〔十七行。「は改行頭。」

右面

邑寺之志已而獲其付之七義壽繼補之遂至備於是新作經藏以「藏焉語日夫孝者善繼人之志善述人之事者也義壽有焉夫地獄天「堂無則已若其有乎如翁之慈善其享生於天堂也又爰疑焉義壽請「余撰其墓誌吾聞義壽性愛書其行商之聰訪四方諸老先生必索「其筆蹟然則應是任者固不之於其人余之不文也豈足受其託哉雖「然其父子不好靈飾浮文余之素尚或有會乎其意者是以來囑之耳「故不敢辭為誌其概略如此銘日

〔これまで七行。「は改行頭。」

一切經典黃檗是刊非彼有力購求實難

翁也損財古寺維附塾能繙經先拜此墓

安政五年歲次戊午秋八月 美濃 錦江 角田炳 撰

同 訥齋 山田惟孝 謹書

雜記 一般に経蔵碑と呼ばれている。安楽寺には安政五年完成の輪蔵造り経蔵がある。当碑はその経蔵が記されている。

100 旗柱 芦屋町正津ヶ浜 濱松神社
安政五年九月吉辰

101 水盤 芦屋町西浜町一―四 光明寺

右面

施主

江田與兵衛

正面

水盤〔横書き〕

左面

安政六年己未

正月吉日

裏面

現□□□

102 旗柱（一对） 芦屋町正門町十四他 神武天皇社

右側正面

奉寄進

左面

錢屋源次

左側右面

錢屋源次

正面

萬延元年申八月

103 備米倉碑 芦屋町中ノ浜六一八（旧金屋町） 道端

右面

発起〔左七行の上に横書き〕

庄屋 大庄屋格 江藤興五郎信照

組頭 同 小田休五郎信行

同 同 柴田清三郎有年

同 同 村田平次郎智房

同 同 江□□右衛門幸定

同 同 高崎儀助基弘

同 同 入江圓助篤實

正面

備米蔵〔左十九行の上に大きな字で横書き〕

米拾俵 江藤興五郎 米拾五俵 小野傳右衛門

同五拾俵 桑桑原傳次郎 同拾三俵 東屋儀三郎

同五拾俵 江田與平 同拾貳俵 米屋源右衛門

同四拾八俵 小田休五郎 同拾貳俵 紀伊國屋藤右衛門

同四拾八表 坂口平四郎 同拾貳俵 油屋助七

同四拾俵 太田源次郎 同拾俵 安高德平

同四拾俵 中西善蔵 同拾俵 米屋傳市

同三拾貳俵 小野清次郎 同拾俵 関屋正五郎

同三拾貳俵 和田武平 同拾俵 福田屋藤次郎

同三拾俵 柴田清三郎 同八俵 村田平次郎

同三拾俵 吉永茂七 同八俵 関屋甚次郎

同三拾俵 桑原甚五郎 同五俵 田中傳三郎

同三拾俵 有田久平 同五俵 吉永市蔵

同貳拾四俵 江田喜右衛門 同五俵 横田熊右衛門

同貳拾四俵 高崎儀助 同五俵 米屋勘兵衛

同貳拾四俵 入江圓助 同五俵 三原屋清七

同貳拾四俵 松吉源次 同五俵 綿屋源兵衛

同貳拾四俵 和田只平 同五俵 掛屋庄右衛門

同貳拾四俵 安宅安兵衛 同五俵 糞屋甚四郎

〔以下の十八行は前の十八行の下に彫られている〕

米五俵 春屋只右衛門

同五俵 丸屋勘藏

同五俵 久満屋多八

同五俵 松尾屋和藏

同五俵 萬屋作右衛門

同五俵 角屋嘉八

同五俵 山本屋久次郎

同五俵 小田屋與平

同三俵 山本屋孫七

同三俵 竹屋直次

同三俵 歙屋正五郎

同三俵 松尾屋和右工門

同貳俵 山本屋久吉

同貳俵 上野屋助十

同貳俵 油屋勘右衛門

同貳俵 枚野甚右工門

同老俵 桶屋安次

以上

左面
米四俵 光明寺 近響

同貳俵 金臺寺 至阿 世 話 人
〔以下六行は右二行の下に彫っている〕

大庄屋格 桑原傳次郎 松吉源次同

同 江田與平 吉永市藏

同 太田源次郎 和田只平

同 坂口平四郎 安高安兵衛

同 中西善藏 綿屋源兵衛

同 小野清次郎 東屋儀三郎

裏面

萬延紀元歲次庚申

秋九月造建立 福岡

石工

市平

雜記 備米藏は海雲寺下の金屋町隅ノ倉というところに建てられていた。備米というのは凶作などの折窮民救済のために貯えた米のことである。

104 灯塔（一对）芦屋町中ノ浜 安養寺

右塔正面

般若塔

左面

當 山 源住大廊

十一世

裏面

文久元年西三月

六百回忌之寄附

左塔正面

破闍塔

裏面
小野清次郎茂廣

105 経塚 芦屋町船頭町八―一一 禅寿寺

右面

願主 江田興平

正面

光明真言二万遍

左面

文久元西七月

花崗岩に変わっている外はおおむね復元されている。旧道標は芦屋町歴
史民俗資料館に保管されている。

108 大山祇神祠 芦屋町山鹿 城山公園(白山神社)

祠右面

文久三年亥二月吉日

波多野土佐守春鎮

台石正面

魚町庄屋

船庄屋兼帯大庄屋格

小田定右工門

大庄屋格

小田彦五郎

大庄屋格

林清三郎

大庄屋格

中西只右衛門

組頭

野間定兵衛

組頭

中西友右工門

小田彦一郎

中西半九郎

倉野儀兵衛

野間藤次郎

106 蛭子社鳥居 芦屋町船頭町二―四八 岡湊神社

右柱

文久元^辛西^年 町内安全

正面額

蛭子社

左柱

奉再建太田源次郎直信

107 道標 芦屋町幸町5 道端・構口傍

北面

文久元^辛西^年 新町

東面

濱口通

川筋道

雑記 ここ十年の間に作り替えられている。現道標は、石材が砂岩から

平橋和作

109 旗柱 芦屋町山鹿一九一八 須賀神社参道

右面

村中

正面

世話人

源次郎

徳三良

若者連中

長四郎

濱七

勝平

貞平

濱次郎

治平

又兵衛

藤平

左面

惣世話人

伝十

裏面

元治元載

110 旗柱 芦屋町西浜町一一―二五 焚火神社参道

右側右面

世話人

孫右衛門

善七

西若連名

兵七

清助

万吉

貞郎

宗右門

左面

安右工門

利平

當浦安全

源一

清次郎

傳三郎

弥八

左側右面

元治二丑六月

次助

福吉

左面

世話人

忠八

甚助

嘉右工門

西若連名

藤次郎

徳五郎

作次郎

勘兵衛

勘兵衛

甚六

111 鳥居残片 芦屋町山鹿浦 巖島神社

頭 長次良

六次良

慶応二^丙寅年

□

取 勝十郎

清工門

浦通世 藤三良

次助

兵七

再話 各右衛門

兵次良

藤蔵

興人好平

勘十

儀助

若連

栄次郎

喜次郎

名

次良兵衛

佐市

首夏吉辰

金十

儀八

清次良

藤右門

雑記 本来は鳥居の柱であるが、明治七年旧九月吉日に旗柱に作り替えられていた。銘は鳥居時代のものである。

112 御潮井台 芦屋町西浜町一一―二五 焚火神社参道

右面

慶應二寅十一月

正面

是從百渡

左面

奉福寫屋勘七

裏面

慶應四年戊辰

保正

三月納経

施主

森三郎

同妻

訂正

113 水盤 芦屋町正門町十四他 神武天皇社

正面

盥盤〔横書き〕

慶應四辰四月

本城觸中

裏面

大宮司

利廣氏

石工

江崎傳十

114 経塚 芦屋町浜口町七 大師堂

正面

南無阿彌陀佛

左面

石工

□三郎

平成二十五年三月発刊『史学論叢第四三号』「北九州市の金石文集成

三」七頁下段19行

「熊本県山鹿市(肥後山鹿) 鋳物師の作品」を「筑前国芦屋の系譜を引く博多鋳物師の作品」に訂正。

平成二十五年三月発刊『史学論叢第四三号』「北九州市の金石文集成

三」九頁下段14行

「昭和十五年一月達之」を「昭和十五年一月建之」に訂正。

平成二十九年三月発刊『史学論叢第四七号』「北九州市の金石文集成

七」三八頁上段14行

「八幡西区山路」を「八幡東区山路」に訂正。

平成二十九年三月発刊『史学論叢第四七号』「北九州市の金石文集成

七」三八頁上段15行

「安永申年四月初八月」を「安永五申年四月初八日」に訂正。

平成二十九年三月発刊『史学論叢第四七号』「北九州市の金石文集成

七」三八頁上段19行

「八幡西区山路」を「八幡東区山路」に訂正。